

備忘録「コロナとわたしと日本人」(12) (2021年7月27日記す)

1 南米ラムダ株の脅威が迫る

東京都の感染者数が激増している。この点は、以下2及び3で述べるとして、長期的な目で見たコロナの危険性からまず始めたい。

①凶悪化する変異株

このところ変異株の凶悪化を示唆するニュースが相次いでいる。中でも注目すべきは以下の3点。

- (1) 南米で発生のラムダ株の脅威
- (2) エアロゾル感染の可能性
- (3) ワクチンの抗体値の低下

②ラムダ株とは？

ラムダ株とは、現在日本で猛威を振るい始めたデルタ株（インド型）とは異なり、南米を起源とする変異株で、ペルーを中心に猛威を振るっている。従来のウィルスより感染力約2倍、「最凶の変異株」ともいわれている。

ラムダ株が将来日本に上陸する可能性は高い。その時になってバタバタするのではなく、今から対策へと動くべきである。今まで以上のテールリスクとなり得るのだから。

③遠くを見るのが苦手な日本人

具体的にその可能性を時間軸で考えてみる。

3ヶ月先にはまだ日本ではラムダ株は拡大しないだろう。だが、6ヶ月先ではどうか、1年先はどうか。さらにその先はどうか。こう考えてみると、何やら現実味に欠ける。だから、政府は日々の対応に忙殺され、まだラムダ株どころではないだろう。

極めて残念だが、日本人は（考えるのではなく）現在に密着して反応する傾向が顕著である。遠くを見る思考（時間軸思考）は苦手である。政府の今までのコロナ対策は、その最悪のサンプルである。

④エアロゾル感染と飛沫感染

行きずりの人が感染して、エアロゾル感染かと疑われた例が、オーストラリアのシドニーにあった（本メモ(11)1⑥⑦参照）。

さらに、エアロゾル感染を裏付ける新しい指摘が続いた(NHK クローズアップ現代。2021年6月23日放映)。

咳をしたり、話をしている途中で出る飛沫は、2メートルほどで地面に落ちる。

これに対し、エアロゾルは、飛沫よりも細かい粒子で空気中に漂い、10メートル先にも達する。

それ違っただけで感染したり、建物内で集団感染するのは、エアコンの空気の流れに乗ったエアロゾルの感染が有力だという。コロナウィルスが空中に漂っていれば、今までのようには社会的距離をとっているだけでは感染を防げない。

⑤抗体値の低下とブースター接種

ワクチン接種による抗体値は、数ヶ月後には低下する。

イギリスでは、新たな変異株に備え抗体値維持のため、3回目のワクチンを追加接種する動き(ブースター接種)が加速している。2回接種の効果を維持できるのは6ヶ月程度と見込んでいるためである。

ヨーロッパではワクチンの3回接種、4回接種に備えてワクチン獲得に走っているという。EUもファイザー社との間で、追加供給を受ける契約を結んだ。

⑥ラムダ株の備えはしているか？

政府はワクチンの追加獲得のため動き出したが、ラムダ株の脅威をも見越して動いているかどうかは心もとない。

今までの政府のやり方を見ると、1年先さらにその先に備えて、十分なワクチン確保には動いてはいないだろう。現政権には草むらから飛び立った鳥を見て、敵兵の潜伏を読む感性に欠けているからである（本メモ（5）3②参照。）遠くを見る思考（時間軸思考）が決定的に欠けているからである。

⑦最悪に備えよ！

日本人は「（今を凌げば）後のことは何とかなる」と考えがちである。どうなるか分からぬ将来のために、お金を使うのを渋る。将来のことはひと事のように感じる。

日本には危機を直視するのを歓迎しない風潮がある。最悪の事態を想定すればコストもかかり、様々な事業の実現性も低下するからである（ルール形成戦略研究所所長・国分俊文多摩大院教授。2021年4月18日日本経済新聞）。

だが、今の目をつぶってやり過ごすしても、問題は潜在化するだけ。いずれ破局点に達する。

2 蛇行する政権 漂流する五輪

①感染者はこれから激増する

京大教授の西浦さんの最新の試算によると、東京都の新規感染者数は8月7日には1日3000人を超え、8月21日には5235人に上る(7月21日、厚労省の専門家会議で示した試算)。

この試算は、感染者数の増え方を現状より低めに仮定しているというから、現実にはこの予測を超える可能性が大きい。

②予測を超える2800人超の新規感染者

7月27日、東京都の新規感染者数が2848人という衝撃的な数字が発表された。

6月中旬に2つの専門家のチームが「8月上旬の東京都内の新規感染者数」を予測したが、いずれも「1000人を超える」だった(本メモ(11)2②参照)。早くも7月下旬には、現実はこれらの予測を完全に凌駕してしまった。

(注)しかし、この数字は必ずしも予測できなかったわけではない。「新規感染者は数千人超」というシミュレーションもあったからである(本メモ(11)2③④参照)。

③首相の現実失認

新規感染者激増の他にも、選手村での陽性者の続出、失踪者、穴だらけのバブル方式など、問題は山積している。だが、首相の言葉にはまるで切迫感がない。

首相の目は霧状のものに覆われ、リアルな現状認識ができないのではないか。今までの発言を追うと、そう疑いたくなる。首相の危険感覚には欠陥があるらしい。

(1) 空疎なキャッチコピー

コロナ禍というこの困難に直面する今だからこそ、世界が団結した象徴としてこの難局を乗り越えることを世界に発信することも意味がある(2021年7月17日)。

(2) 五輪中止への抵抗感

・世界から選手が安心して参加できるようにするとともに、国民の命と健康を守っていくのが開催の前提条件だ。これが崩れれば、行わない(2021年6月7日)。

・「やめることは、いちばん簡単なこと、楽なことだ」「挑戦するのが政府の役割だ」と強調（2021年7月21日 ウォール・ストリート・ジャーナルのインタビュー）。

（3）根拠なき自信

専門家の意見や客観的な数値を見て、国民の命と健康を守りながら開催することは可能。この判断には自信がある。ワクチン接種者数が極めて順調に増えているため、（五輪開催で新型コロナの感染が拡大するとの）懸念はあたらない（2021年7月27日）。

（4）現実失認

7月27日の「東京都の新規感染者数2848人」との衝撃的な数字の感想を求められた時の菅首相の発言。

- ・車の制限やテレワークなど、人流は減少している。心配はない。
- ・人流が減っているので、（東京五輪の）中止はない（7月27日）。

④首相は五輪を中止できるか

前述のように、首相は「五輪中止は簡単」だというが、勿論、これは言葉のあや。中止などできるわけがない。それは首相の政治的な死を意味するからである。

首相にとって再選が至上命令。その道具として五輪を利用している。不幸なことに、五輪開催/続行は個人の保身のためであって、国民全体のためではない。

ただし、感染の急拡大が続ければ予想外の「首相退陣・五輪中止」のシナリオもある。

首相退陣もカウントダウンかも知れない。今はあらゆる兆候から目が離せない。

⑤バッハ会長のポジショントーク

バッハ会長も「五輪開催を恐れる必要はない」と、首相と比べて危機意識の低さは遜色がない。ポジション・トーカーの面目躍如である。

（注）ポジション・トーカーとは、ポジショントークをする人。自分の立場を守るために意見を、中立を装つて発言する人。和製英語である。こういう人は全く信用できない。

（1）根拠なき自信

（五輪開催を）日本国民が恐れる必要はない。五輪関係者と日本人を明確に隔離する措置を講じており、大会の安全性に全幅の信頼を寄せていい（2021年7月14日）。

(2) 現実夢想

- ・コロナのリスクをわれわれが持ち込む事は絶対にない(2021年7月15日)。
- ・今回の五輪は参加者全員に厳しいルールと対策が課せられた史上最も制限が厳しいスポーツイベント。これらの対策は、WHOの事務局長より承認を受け、賛成された(2021年7月22日)。

(3) 余計なお世話

日本のアスリートたちが五輪で活躍する姿を見れば、日本人々の感情を少し和らぐと自信を持っている(2021年7月18日)。

⑥未知のリスクに言葉では対抗できない

コロナ禍は未知のテールリスクである。

未知だから、人間の知識・経験は及ばない。人間の気分/感情とは何の関係もないところでコロナは感染を拡大する。コロナという未知のテールリスクの脅威に対し、「恐るな」「コロナのリスクを持ち込むことはない」といつても、何の意味もない。

言葉でコロナに太刀打ちできるわけがない。自然の脅威に対して、人間の情緒で対抗できるわけがない。人間の支配外のところで、コロナはコロナの論理で感染拡大する。

⑦無知か意図的か?

そのことを、首相もバッハ会長も理解できないらしい。いや、バッハ会長は理解しているが、どうやら保身のためにポジショントークを続けている。

だが、無知であろうと、意図的であろうと、国民の生命・健康・生活を危険にさらすことには変わりない。

⑧「死ぬか生きるか」の賭けをする愚行

感染拡大下の五輪開催は、ロシアンルーレットをしているようなもの。

ゲームの死ぬ確率は少なくとも6分の1、危険極まりない。

たとえ、杞憂と分かっていても賭けはしないのがリスク管理/危機管理の要諦である。

(注)回転式けん銃（リボルバー）に1発だけ弾薬を装填し、適当にシリンドラーを回転させてから自分の頭に向け引き金を引くゲーム（Wikipedia）。

こんな危険なゲームがあると知ったのは、40年以上前に、アメリカで映画「ディアハンター」を見た時である。ロバート・デ・ニーロ、メリル・ストリープ、クリストファー・ウォーケンなど、後の名優たちが出演していた。

3 五輪報道と劣化する NHK

①感染拡大が続く中で、東京五輪が強行されている。

今の状況を考えると、とても祝う気分にはなれない。五輪開催/続行はコロナの感染を促進するだけで、感染拡大防止には何の役にも立たない。

②「平和の祭典」のお題目に惑わされてはいけない。酔ってはならない。スポーツも人間の諸活動の1つに過ぎない。スポーツに何か特権的な価値があるわけではない。スポーツ=善ではない。スポーツを世渡りの手段にする人も多い。

わたしたちは、五輪族（IOC、JOC、五輪政策に関与する政治家・官僚など）による、スポーツの商業主義化の一端を目のあたりにしている。

③だが、開会式以降の連日のNHKテレビは、EテレやBS1も含め3チャンネルを投入して、開会式から連日、朝から晩まで五輪報道一色。

多様な意見や世論とかけ離れた1点集中報道。まるでどこかの国の国営テレビである。

④コロナ禍に苦しむ若者、女性、外国人、生活困窮者、社会的弱者などから目をそらしていくのか。ここまで花見酒の祝宴に肩入れしていいのか。それでは刹那主義だろう。

⑤NHKはどうなっているのか？ 感染拡大が急拡大しているのに、「われ関せず」といわんばかりである。世間は太平安泰のような報道ぶりである。

「すべて世は事もなし」は、ロバート・ブラウニング/上田敏(訳)の名詩「春の朝」^{あした}の世界に限ってほしい。

⑥コロナ禍の不安、閉塞感、うつぶんを晴らしたい、忘れたいという風潮が社会に瀰漫する。

だからといって、苦しい現実から目をそらし、一瞬の高揚感・解放感に浸っても、現実は変わらない。連日のNHKのテレビ報道は、現実から目をそらさせる「目くらまし作用」を果たしている。

⑦NHK報道はまた、ムードを高めワクワク感を盛り上げ、五輪関連の人出増（「人出促進作用」）をもたらす。

国立競技場、聖火ランナー、自転車のロードレースなどの各会場付近には、ひと目でも選手を見たい/記念撮影をしたいという人がどっと集まる。観戦自粛といつても守られない。それが人の心理である。

こうして、NHK の五輪報道は「目くらまし」と「人出促進」という、感染拡大防止に有害な結果をもたらしている。

⑧もちろんこれだけの大幅な番組編成をするのは、明確な意図があってのことである。バランスが取れない報道ぶりというより、民意を五輪に誘導し、コロナ対策の失敗を覆い隠す。下種げすの勘織りだが、政権を慮る意図が働いているだろう。今回の報道で、公共放送の名に安住して、劣化し続ける NHK の体質が露わになった。NHK の続落的劣化を白日の下に晒した。

⑨目の前のイベントに追従して冷徹さを失っては、その正確な俯瞰的評価ができなくなる。情緒は深く静かに浸透する。人は理性を忘れ、情緒に流される。やがてそれと気づかぬうちに、それは社会を席巻する。

やがて世間の関心は次のトピックに移り、東京五輪のデフォルメされた評価が記録に残される。あたかも大多数が祝福したように。そうなってからでは遅い。一人一人が情緒化の小さな芽を摘み取っていく覚悟がいる。

⑩わたしは、渦中に入らず、事の外に立って俯瞰的に状況を観察し記録を続けたい。危機の中の祝宴の意味を記述したい。後世が「コロナ禍の中の東京五輪」を正確に評価するために。

4 飲食店はスケープゴートか？

①7月にはいっても、首相は「(飲食店が) 酒を出すから悪い」とぼやいていた、と報道された。こんな報道はゴシップ記事の類と思っていたが、そうでもないらしい。相変わらず、酒を出す時間の制限が感染対策の一つの柱となっている。

(注)早くからわたしは専門家の意見（飲食店主犯説）について疑問視し、政府の方針に反対した（本稿（8）1④参照）。最近も再び「飲食店主犯説は過去の亡靈」であると指摘した（本メモ（9の1）1④、同（8）1④⑤⑥参照）。

②飲食店主犯説に関し、興味深い対談があった（2021年7月12日BSの「報道19 30」中の小池晃共産党書記局長と鴨下一郎自民党ワクチンPT座長の対談）。

それによれば、飲食がコロナの感染源だとする見解は、データ数が少なく信頼性に欠けるという。これが本当なら、今までの飲食店いじめは何だったのか。飲食店はスケープゴートにされたのである。

1部の専門家と時短要請/酒類提供制限をした政府は、早急にこの点を説明/解明する責務がある。

③この報道で、医師の倉持仁さんが興味ある発言をしていた。その要旨。

お酒だけに責任を押し付けるのは全くの的外れ。飲食店での感染といつても、飛沫感染やエアロゾル感染が多い。これをコントロールすれば、酒を飲もうと長時間滞在しようと関係ない。飲食店での酒の提供を制限するのは、死亡事故が起こるから車に乗るなというようなもの。

④倉持さんは、酒を禁止しなくともよい具体策を提示している。

- (1) カウンター席もテーブル席も、それぞれの席と隣の席との間に高い仕切りを設ける。
- (2) お店の換気を徹底する。
- (3) そのうえで、お客様の飲酒時間や人数の制限を実施する。

⑤ポイントは天井近くまで届く高い仕切りと換気の徹底。それにより飛沫感染やエアロゾル感染をほぼ防げる。

一律に営業時間を制限したり酒の提供を禁止するのと違い、こうすれば飲食店の営業も回っていく。このアイディアは、医療や製造の現場で開発したノウ・ハウだという。

⑥スペースが狭く、換気が悪く、小規模の施設が問題。密閉された空間で、人が密集し、密接して話をする。この条件を満たせば会議室でも、カラオケボックスでも、喫茶店でも、どんな施設でも危険である。つまり酒の提供が問題ではなく、施設の構造が問題の本質。

⑦なお、7月中旬に政府が打ち出した「飲食店への酒類提供自粛に関する方針」（後に撤回）は、上述の通り全くの方向違い。

西村大臣は政権中枢内ではまあ健闘していると思っていただけに、わたしの第一印象は「西村大臣！『ブルータス汝もか』」であった。

撤回したから済むというレベルの話ではない。西村大臣に限らず「民間への歯止めのない介入」に疑問を抱かないような、政府の体質に重大な問題がある。

際限なく介入しては「法の支配」を搖るがす。

自粛方針の危険な意味については、追って論ずるつもりである。